

東近江市永源寺相谷町

相谷熊原遺跡

発掘調査現地説明会



平成21年12月20日(日)

調査主体:滋賀県教育委員会

調査機関:(財)滋賀県文化財保護協会

あいだにくまはら

相谷熊原遺跡 現地説明会資料

1. 相谷熊原遺跡の概要

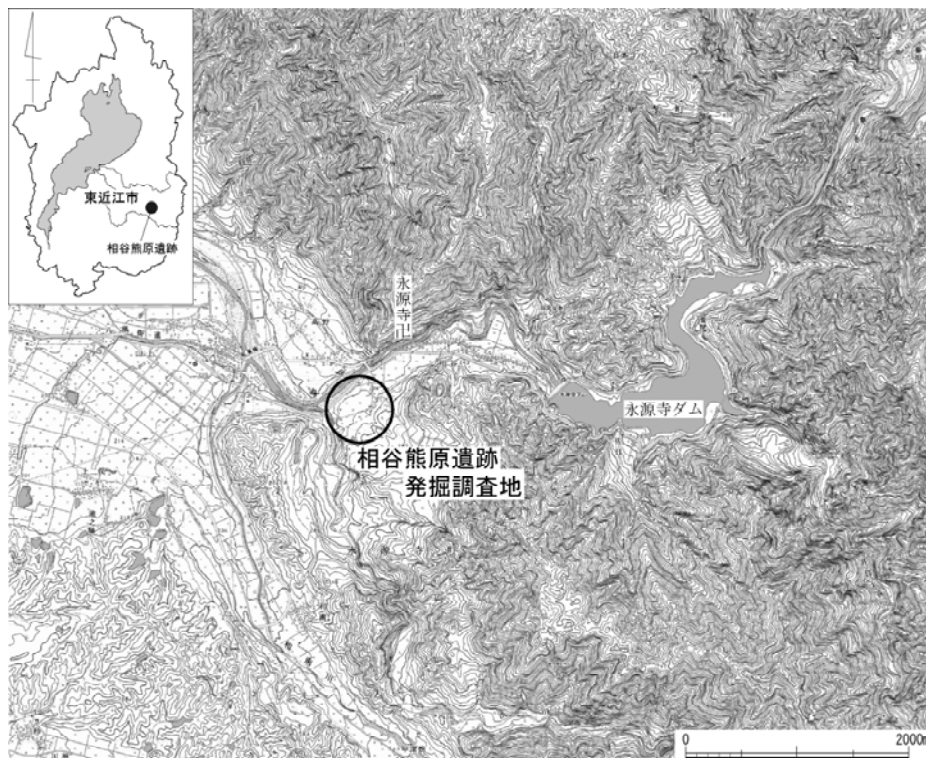
(1) 位置

相谷熊原遺跡は、滋賀県東近江市永源寺相谷町熊原地先、愛知川の左岸の河岸段丘上に所在します。紅葉の名所としても名高い臨済宗永源寺は、愛知川を挟んで対岸に所在します。

遺跡は愛知川の浸食作用によって形成された河岸段丘上に所在し、愛知川とその支流である渋川の合流地点、通称「コマガ谷」の先端部に立地します。この場所は、愛知川が湖東平野に流れ込む先端部に当たり、山間地と平野部の交差する場所になります。

調査地が所在する東近江市永源寺相谷町熊原の地が文献史料等に登場するのは、寂室元光によって開基された永源寺に、近江国守護佐々木六角氏頼が熊原の地を永源寺に寄進した康安2年(1362)が最初です。愛知川を挟んで永源寺の対岸に位置する熊原の地は、少なくとも南北朝期には六角氏の所領となっていたことがわかります。

いっぽう、今回の発表資料でもある縄文時代の遺跡については、本遺跡が所在する愛知川上流域(旧永源寺町域)では調査事例がほとんどなく、詳細は長らく不明でした。旧永源寺町域で、これまでにわかっている縄文時代の遺跡は本遺跡を含めても数例程度で、伊勢湾地方から鈴鹿山脈を経て湖東平野、さらには琵琶湖とを結ぶ結節点にあたるこの地域の歴史的経過の解明は、縄文時代における近江とその他の地域との交流のあり方を探るうえで、重要な意味を持つといえます。



(2) 調査履歴(試掘調査)

相谷熊原遺跡は、平成21年度に詳細が判明した遺跡です。それまでも、水田中から縄文時代晩期後半の土器が採集されていたりしましたが、遺跡の範囲・規模等の詳細は全く不明

でした。

平成21年度から、この場所で水田の区画を大きく作り替えるほ場整備工事が計画され、工事前に埋蔵文化財の有無・内容を把握し、その保護対策を図るための試掘調査を実施することとなりました。

試掘調査は、平成21年4月から5月にかけて実施し（一部9月上旬に実施）、その結果、工事範囲のほぼ全域から縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に、縄文時代および中世の遺構・遺物が大半を占めており、その他の時期の遺構・遺物についてはほとんど確認できませんでした。

縄文時代の遺物としては、早期末から晩期後半にかけての土器が出土しています。なかでも中期から後期にかけての土器が広範囲に、かつ相対的に多かったことから、その頃に最盛期を迎えていた可能性が考えられます。また、石鏃等の石製品や、石器を作る際の石材のカスである剥片等も出土しています。

2. 発掘調査の成果

(1) 概要

平成21年7月から、工事によって遺跡の破壊が免れない箇所について本発掘調査を実施し、図面・写真等による記録化作業を行っています。これまでに多くの遺構・遺物が検出されていますが、調査区西端のA区では、縄文時代のピット・土坑（墓の可能性もあります）・配石遺構・集石遺構等を発見しました。また、調査区南端のB区では縄文時代晩期前半の土器棺墓を現段階で14基検出しています。

今回発見された縄文時代の遺構・遺物は、調査事例の少なかった東近江市東部域（鈴鹿山麓）の縄文時代像を提供するモデルとして評価できるものです。発掘調査は現在も進行中であり、今後も新たな発見があるかもしれませんが、ここでは現段階で判明している調査成果について以下述べていきます。

(2) 検出遺構

①土器棺墓

土器棺墓は調査地の南側、渋川に沿った谷部に設定した調査区（B区）で検出されました。現段階で14基の埋設土器遺構を確認しています。

土器棺墓とは土器を埋葬の容器（施設）として用い、死者を葬るものであり、それが墓と認定されるためには、土器の中に埋葬された人骨がなければなりません。相谷熊原遺跡で見つかった土器棺墓と考えられる遺構には、土器棺中から明確な人骨は今のところ確認されていません（土器棺墓の埋土中から細粒化した骨片が見つかっています）。ただし、土器の設置形態からおそらく土器棺墓と認定して良いだろうと考えています。

相谷熊原遺跡で発見された土器棺墓は、いずれも時期的には同時期の縄文時代晩期前半に帰属するものと考えられます。高さ40～50cm程度の深鉢形土器が入る穴を掘り、深鉢を横向けもしくは斜めにして入れ、棺としているものが大半を占めます。S304のように口縁部を下向きにしたものも見つかっています。

深鉢の口縁部は、浅鉢や別の深鉢で蓋とするものや（S043・S271・S501）、土器の破片や小石等で蓋代わりにしたもの（S503）、現状で蓋の存在が確認出来ないものなどに大別出来ます。棺本体は深鉢をほぼ完全な形のままで使用しているものが大半ですが、S504のように検出した当初から土器棺が完全な形でなく、深鉢を皿状に割って埋めた可能性のあるものも存在します。

また、S501・S271・S272では、土器棺の上部に石が置かれ、その石が土器棺内に落ち込んでいる状況も確認されました。

②配石遺構・集石遺構

配石遺構・集石遺構は、調査地の中でも最も愛知川に近い箇所に設定したA区で検出されました。ともに出土遺物が現段階では出土しておらず、遺構の帰属する時期については留保せざるを得ませんが、配石遺構についてはその形態から、縄文時代後期頃の可能性が考えられます。

配石遺構は、配石の大半が強く被熱していること、石を組んだ状態であることなどから炉として使用されていた可能性があります。周辺から焼土・炭等が現段階で検出されていないので、遺構の性格については今後の検討が必要です。

集石遺構は、径1.3～1.4mの不定円形の中に礫が詰まった状態で見つかりました。完全に掘りきっていないので最終的な形態は不明ですが、他遺跡の検出事例から浅い鉢状の形態になるものと想定されます。世界の民族例では、穴を掘り、その中に焼いた多数の小礫を生のお食糧をともに詰め、その上から土を被せて蒸し焼きにして調理する習俗があります。集石遺構の用途についても、このような石蒸し調理に使用されたものとする意見が一般的です。遺構の中の礫には熱を受けたものもあることから、この遺構についても火を使った使用を想定しています。

(3) 出土遺物

発掘調査では、土器のほかに様々な石製品や土製品も出土しています。

狩猟具である石鏃は、遺跡のほぼ全域で出土していますが、特にB区での出土量が群を抜いています。調査中の段階ですので、最終的な数量はまだカウント出来ていませんが、現段階で少なくとも200点以上になるものと想定しています。石鏃はサヌカイトもしくはチャートを原石としており、それら以外の石材は現段階で確認されていません。

また、磨製石斧が3点、漁撈具である石錘（切目石錘）がB区で1点出土しています。

このほか、B区からは祭祀に使用されたと考えられている遺物も出土しています。

石棒は土器棺墓が集中するトレンチのほぼ中央部から出土しています。石棒とは棒状の磨製石器で、端部が男根状に整形されたものや円棒のままのものなどがあります。石棒の用途についてはその特異な形態から、祭祀用具と推定されています。今回出土した石棒は両側が欠損した状態で出土しました。

ミニチュア土器は、土器棺墓で使用されている深鉢形土器を模倣した形態を採っており、土器棺墓とほぼ同時期の所産と考えられます。高さ3.8cm、口径5.5cmを測り、口縁部の一部を打ち欠いた状態で出土しました。

石冠形土製品は側面形が凸字形を呈する、縄文時代晩期の磨製石製品を模したものです。原型となる石冠は、岐阜県域を中心として中部以東で盛行するもので、やや扁平な半円状の自然礫、あるいは楕円形の自然礫を半割して素材とし、敲打と研磨によって冠形に整形したものです。用途としては儀礼等に使用したものと考えられています。これについても、底の部分が欠損した状態で出土しました。

これらはいずれも日常生活の道具としてではなく、祭祀道具としての用途が想定されています。土器棺墓が集中するB区で出土していることから、この場所で葬送に伴う祭祀に使用されたのではないかと考えてしまいますが、葬送に伴う祭祀がどのような形態で執り行われていたのか、出土状況からは想定が困難なため、使用方法・目的等については今後の検討課題です。

3. まとめ

(1) 縄文時代の相谷熊原遺跡

今回の発掘調査では相谷熊原遺跡の南端部において、縄文時代晩期前半代の土器棺墓が10基以上まとまって発見されました。また、遺跡の西端部では帰属時期の詳細については検討が必要ですが、縄文時代後期を一つの定点とする配石遺構等の遺構群が見つっています。

相谷熊原遺跡は4～5月に実施した試掘調査の結果、熊原地区の水田域ほぼ一帯が遺跡の範囲となることがわかりました。さらに今回の発掘調査によって、遺跡の縁辺部に生活の痕跡が稠密に分布する状況がさらに確認されました。また、縄文時代晩期の土器棺墓が10基以上検出されたことは、この遺跡が愛知川上流域のなかでも拠点的な集落であったことを予測させる資料として評価できます。鈴鹿山脈を水源とし、琵琶湖へと注ぐ愛知川が湖東平野へと注ぎ込む、その入口部分に相谷熊原遺跡が立地していること、眼下には近江と東国を結ぶ後世の八風街道が通っていること、などを併せて考えると、八風街道の原型ともいえる琵琶湖周辺地域と伊勢湾沿岸地域とを結ぶ交通ルートが、すでに縄文時代には存在していた可能性が考えられます。

試掘調査では縄文時代早期の土器も確認されていることから、ほぼ縄文時代を通じてこの場所が縄文人にとっての生活の場であったことがわかります。現段階での調査結果では、縄文時代のなかでも限られた時期の遺構や遺物しか確認されていませんが、今後の発掘調査の進展によって、さらに幅広い時期の生活の痕跡が発見される可能性は極めて高いといえます。

(2) 土器棺墓の評価

縄文時代の関西地方ならびに西日本において、棺を用いた可能性のある埋葬遺構が顕在化する時期は限られています。現在のところ、2つの時期にその出現と盛行が想定されています。

ひとつは縄文時代中期後葉から後期前葉の時期です。住居の入口や外部の周辺に小さな穴を掘り、そこに土器を据えて埋め戻すもので、「埋設土器遺構」と呼ばれています。

滋賀県内では、旧能登川町域の東近江市今安楽寺遺跡等で検出されています。これを小児用の棺を納めた埋葬遺構だとする意見もあり、その場合、この時期が関西地方における棺を用いた可能性のある埋葬遺構の出現期となります。ただし、これを埋葬遺構ではなく、産後の褌（えな）を納めた遺構とする意見もあり、その評価はまだ定まっていません。

その後、縄文時代後期中葉から後期末葉において、棺を用いた可能性のある明確な事例はほとんど確認されていません。

棺を用いた可能性のある埋葬遺構が、関西地方ならびに西日本において確実に顕在化するのは縄文時代晩期以降です。その多くは、土器を棺として転用した「土器棺墓」であり、特にその数が爆発的に増加するのは、晩期の後半期になってからであることがこれまでの発掘事例から判明しており、滋賀県下でも晩期後半の土器棺墓の検出事例は県内各地から報告されています。

今回の調査で検出した「土器棺墓」は、棺を用いた可能性のある埋葬遺構が爆発的に増加する直前の例に該当し、その出現期の様相を把握していくうえで貴重な例として、評価することが出来るものです。



1. 調査区全景(B区、東から)



2. 土器棺出土状況



3. 土器棺墓S088 検出状況
(取り上げ済み)



4. 土器棺墓S272 検出状況
(土器棺の上部に置かれていた石が崩落したものと考えられる)



5. 土器棺墓S503 検出状況
(深鉢2個体の破片を蓋として使用)



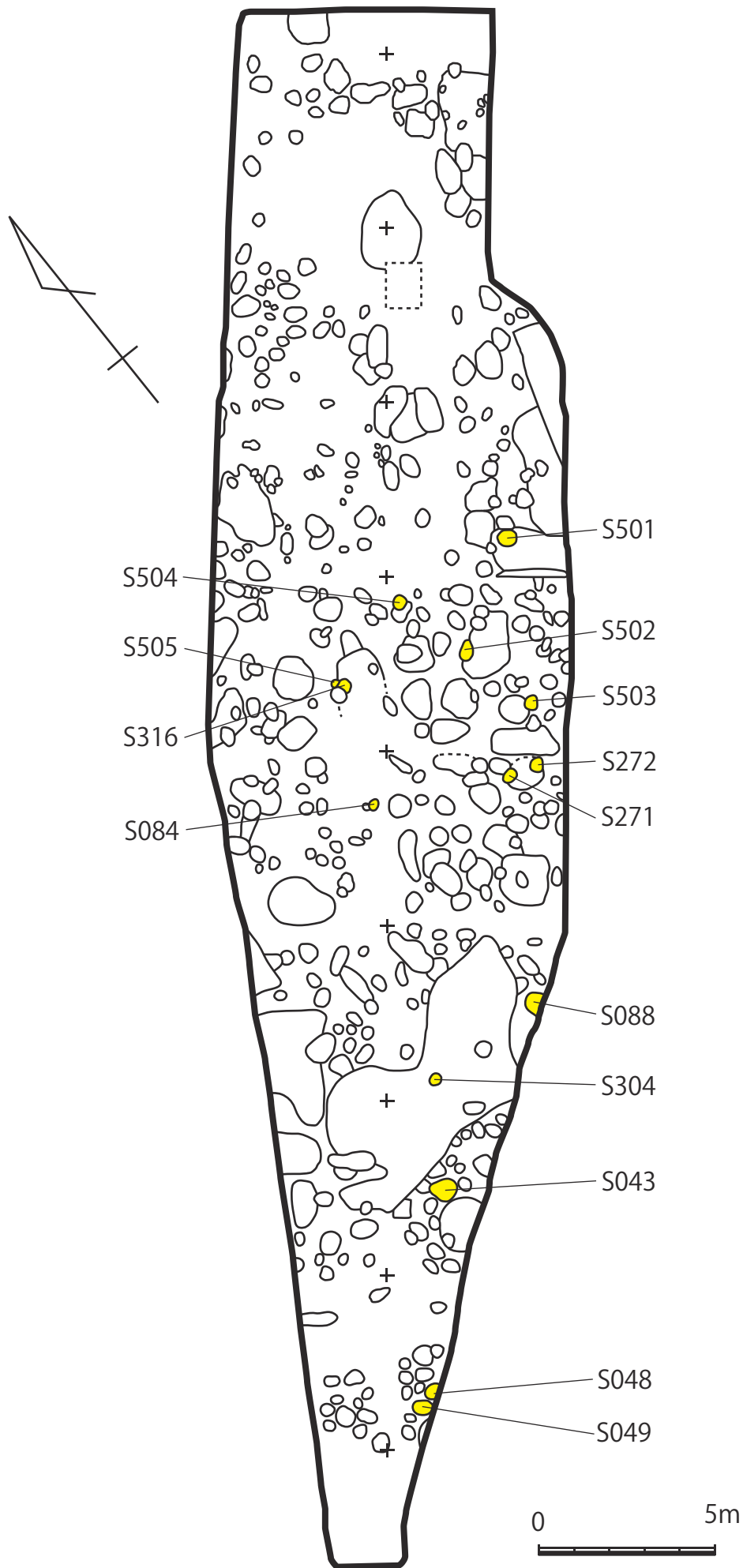
6. 土器棺S271 検出状況



7. 集石遺構 A区S049

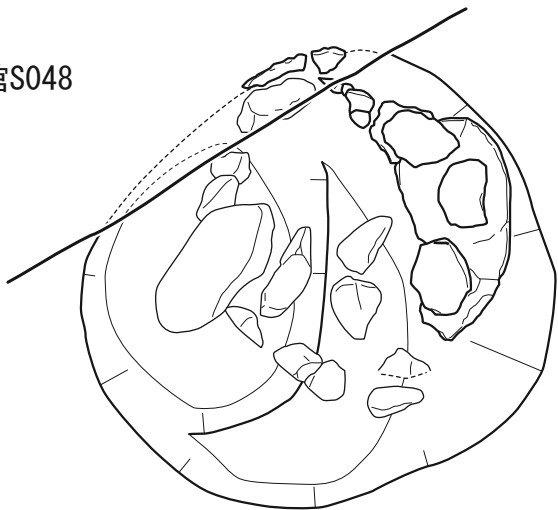


8. 配石遺構 A区S221

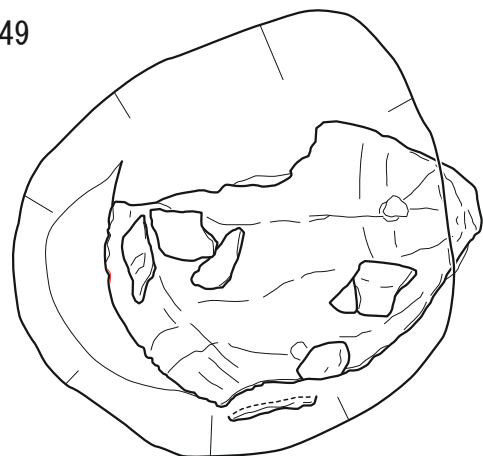


調査区の遺構配置図

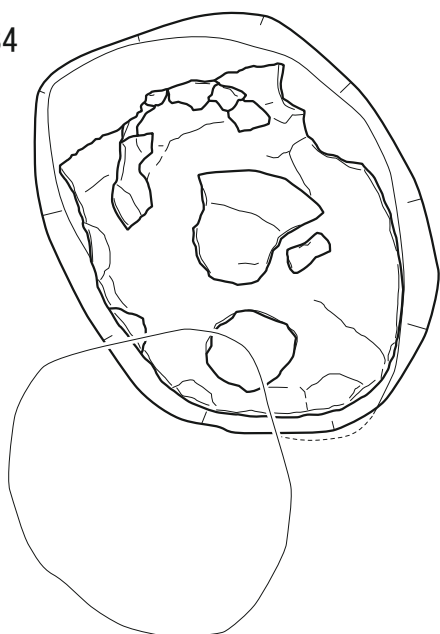
土器棺S048



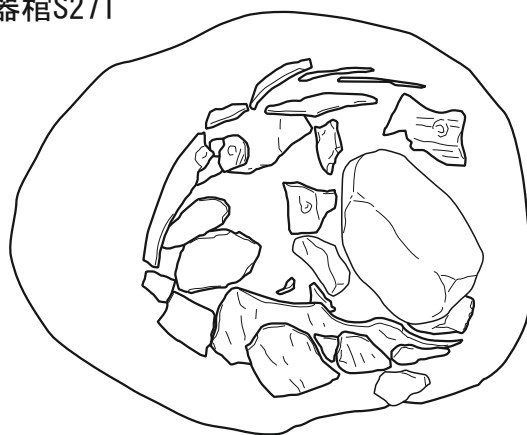
土器棺S049



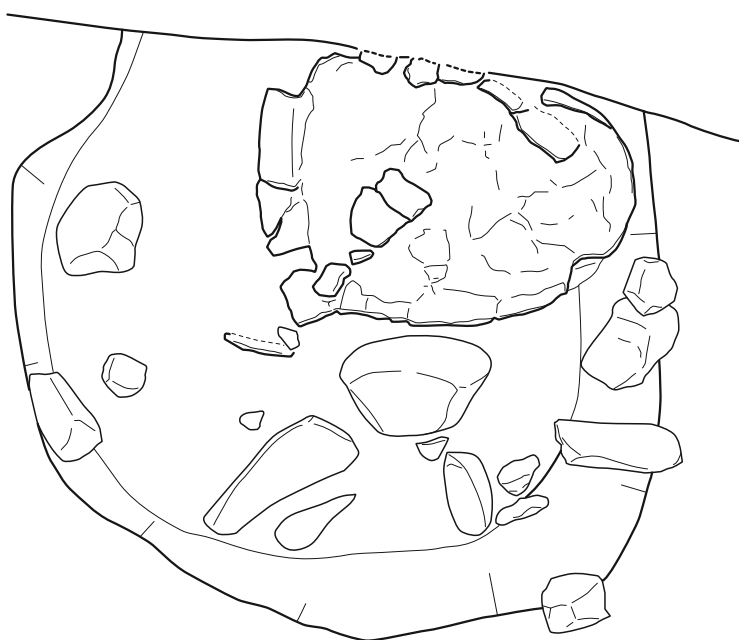
土器棺S084



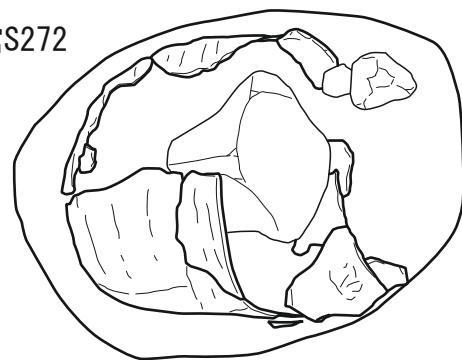
土器棺S271



土器棺S088



土器棺S272



0 50cm



私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages